

バングラデシュ ダッカ日本人学校に勤務して

中 村 哲*

I バングラデシュ概観

バングラデシュへは空路ホンコン・バンコク経由で9時間半約7,000kmの距離である。首都ダッカ市は北緯23°50' ほぼ北回帰線の位置にあたり、台湾中部と同緯度である。

気候的には熱帯と温帯の境目にあたり、雨季と乾期をはっきりしている。雨季(4月~9月)には空が曇りスコール的な雨がよく降り、乾期(10月~3月)にはからりとした晴天が続く。夏の日中は気温が40°C程にも昇りひどく蒸し暑く、冬は最低12°C程で空気が乾燥している。雨季にあたる夏はヒマラヤの雪とけ水やアッサム地方に降った雨がガンジェス川やブラマプトラ川を流れ下ってじわじわと下流の巨大なデルタ地帯を水浸しにする。バングラデシュはこの二大河川のデルタに位置しているので水害は毎年起こり、国土は砂や粘土に覆われていて石ころがみられない。

国土の面積は14万km²、北海道の約1.8倍にあたる。平坦地なので耕地率は66%と高く、そのほとんどは米とジャートの栽培地である。人口の94%は農村地域に居住し、その内の75%が農民である。農家1戸当りの平均耕地は3.2エーカー(約1.3ha)と狭く、農業技術のおくれと化学肥料の投入が少ないことから土地生産性が極めて低く農民の生活は貧しい。

温暖な気候は水さえあれば米の三期作を可能にし、政府は乾季の灌漑に力を入れ、米の増産を計ろうと努力している。水田耕作という集約農業がかろうじて約

8,000万人のこの国の人口を支えているといえる。輸出品のほとんどはジャートおよびジャート製品であり、総輸出額の80%を占めている。

バングラデシュは1971年独立した新生国であり、この国の経済の低調は、資源不足とインドーイギリスー西パキスタンと続く長い被支配・半被支配の歴史と大きく関係している。建国の父と言われた故ムジブラーマン首相が暗殺され(75年8月)、軍事政権による権力争いのクーデターも続いたが、最近では米の豊作と相まってジアウル=ラーマン大統領の下で政情も安定しつつある。

II バングラデシュ人の生活

人口の85%は回教徒であり中近東の厳しい回教の戒律も東のここまでくるとやや薄れた型として現われているが朝・夕の祈りと共に社会の秩序は回教の戒律によって保たれている。生活の卑近な例でみると回教徒は豚を忌み嫌って食べない・酒を飲まない・女性は余り外出しないなど宗教心は厚い。しかし仏教国のような謙虚さ礼節き勤勉さなどは少ないように感じられるがこれには約300年のイギリス植民地という歴史的背景も影響しているようである。

服装は男性は腰に「ルンギー」と呼ばれる腰巻状の布をまき、女性はほとんど「サリー」姿で髪を長く伸ばしおさげにしているのが一般的である。食生活は米を主食としカレーとダール(豆のスープ)が常食であり手づかみで食べる。各種スパイスを入れたこの強烈な辛さのカレーは、熱帯の厳しい自然環境では体力の保

*豊橋市立福岡小学校



写真1 ダッカ市内のバザール(市場)「ナム」売りの店

持に必要な食べ物らしい。住居は都市ではレンガ造り、農村ではトタンやわら屋根に土や竹の簀の子の壁、土間が一般的である。電気は大都市にしかなく、農村ではランプ生活である。「リキシャ」と呼ばれる人力の三輪車が庶民の足となっている。「ダッカで石を投げれば乞食カリキシャかモスクに当る。」と言われる言葉が、ダッカの一面を表わしている。

III ダッカ日本人学校

ダッカ日本人学校は75年10月に現地日本人社会の人々の強い要請で開校された。当時在留邦人は約170名で、ほとんどの人がダッカに居住していた。学校が開かれるまでは日本人の子ども達はアメリカンスクールや現地のイギリス系私立学校に通っていた。親の任期が2～3年の短い期間では英語による教育は大きな問題であり子を持つ親の悩みであった。

75年10月9日現地に入った時は内地派遣教員は自分1人だけであり、校舎(民家を借りて改造したもの)も改造の途中であった。現地採用の2人の日本女性の先生と3人でともかく開校したが、正に黑板と教科書とノートだけの学習であった。12月に1名が派遣され、1月に300万円相当の教具が居き、4月に学校長が派遣されようやく76年度から本格的に学校経営が始まった。

当初は設備の充実と教具の補充にかなりの時間を消費した。文化や言語、物資の違いから何をすることも時



写真2 社会見学(農村の訪問)

間がかかり、神経が疲れることが多かった。

学校での指導目標を①内地並の教育をし学力の向上を計る。②娯楽の少ない現地では日本での季節の行事をできるだけ取り入れて学校生活にうおいを持たせる。③国際性を育てる。にあてた。ダッカ校は小規模校(幼稚部を入れて20～25名)だったので、子ども達の縦の結びつきは行事や毎日の学校生活のほとんどの場面でみられ、年齢を越えた助け合いやほほえましい協力がいくらかあった。反面1学年多くて3～4名という編成なので、同学年同士での磨き合いなど横の関係には問題があった。また、複式授業の問題点もみられた。海外校という特殊性を生かすように、アメリカンスクールとの交流、現地テレビ番組による日本の歌の紹介、文化の日の行事参加などは積極的に進めた。また、英語教育も週2時間課外として英米人から直接学習した。その他、社会見学や季節の動植物の観察なども務めて取り入れた。

日本人学校ができたことは在留日本人社会の1つのままとりとしての働きにもなった。全在留邦人を集めての運動会が行われるようになり、また、日本人総会や、日本人祭りなどには子ども達の合奏や劇の発表の場が持たれるようになった。

2年半の海外校勤務も長いようで短かく、いくつかの問題を残して任期終了となった。気候の違いからくる理科の指導計画、異質の文化の中で学ぶ社会の指導

計画、現地校や外国校との交流計画など現地の自然や文化、社会、海外という特殊性をふまえた自主カリキュラムの必要性が感じられた。国内でも学校教育に「ゆ

とりと充実」が真剣に検討されている時期でもある。これらの諸問題もこれから続いていく日本人学校の歩みの中で1つ1つ解決されていくものと思う。